

# 命令文末の要素とそのカテゴリ

森 川 正 博

## 0. はじめに

日本語の命令文には、例えば（１）、（２）の例文が示すように、文末にどのような要素を用いるかによって表現形式に幅がある。<sup>1</sup>

- （１） a. さっさと行け！（[ik-e]）  
       b. 早く食べろ！（[tabe-ro]）  
       c. さっさと歩いて！  
       c'. さっさと歩いてください！  
       d. 早く食べな！  
       d'. 早く食べなさい！  
       e. 十分気を付ける {こと／の} ！
- （２） a. そんなもの食べないで！  
       b. そんなもの食べないでください！  
       c. そんなもの食べない {こと／の} ！  
       d. 行くな！

（１ a-e）は肯定命令を、そして（２ a-d）は否定命令を表す。文末に、[e]「ろ（[ro]）」「な」「なさい」のような命令形を用いる命令文もあれば、それ自体は命令を表さない要素を持つ命令文もある。<sup>2</sup> 後者の例としての（１ c-c'）、（２ a-b）は文脈によっては、聞き手への強制ではない「依頼」とも解釈できる。また、（１ e）、（２ c）もイントネーションによっては、感嘆文や疑問文とも解釈できる。本稿では、文脈によっては命令の解釈を持つ

ことができる文も命令文として取り扱い、考察していく。

国文法では、命令形による命令文の文末要素を、主として終助詞、あるいは間投助詞であるとし、その研究が今日に至っている（時枝（1941）、寺村（1984）、尾上（2001）など参照）。生成文法でも Rizzi（1997）の提唱する分離CP構造を用いた研究が最近出始めているが、命令文末の要素が占める構造上の位置は明らかになってはいない。例えば長谷川（2011）は、英語とは異なり日本語は主節主語と発話の力（Force）との間に人称のみの一致が見られ、そして両者間に介在する定性（Fin）が形態的に命令の「ろ」や禁止の「な」などを取るとしている。しかしこの「ろ」「な」を、Fin位置に生起できる形式名詞「こと／の」と同じカテゴリとするのは疑問である。また、長谷川の見解は、榎原（2011）の「FinはForceの指定には関与しない」とする見解とも矛盾する（長谷川（2011）、榎原（2011）、森川（2009）参照）。

本稿の目的は、どのような命令文にもモダリティが関わるという観点から、Rizziの分離CP構造を用いた日本語の命令文の構造において、命令文末の要素がどこに位置するかを示すことでそのカテゴリを確定するとともに、国文法で終助詞／間投助詞とみなされている要素を再分析することにある。

本稿の構成は、次のようになっている。第1節で、モダリティは一般的に命題より上位の層の要素が関わるが、命題内の述部要素がモダリティ表現として表出するという先行研究を紹介する。第2節2.1では、肯定の命令文末のモダリティ表現の[e]／[ro]が、命題内のカテゴリであることを示し、なぜそれがモダリティを表すのかを、分離CP構造を用いて考察する。2.2から2.4は、2.1で用いた分析を終助詞「て」「な」「こと／の」に適用し、それぞれのカテゴリを考察する。第3節は、否定の命令文末に表出する終助詞「で」「な」を取り上げ、それらも構造上、命題内あるいは命題に関わるカテゴリであることを主張する。第4節では、平叙文の形が命令文として用いられる特殊な場合を考察する。そして第5節では、本稿

のまとめを述べる。

## 1. モダリティ表現と分離CP構造

命令文とは、発話時において話し手が聞き手に対して行為を強制する文である。日本語の命令文には、例えば「～なさい」のような主観性を帯びた文末要素を伴うことが多い。これは、中右（1980）、仁田（1991）、森川（2009）などに従うと、モダリティが関わると考えられる。つまり、モダリティとは、発話時における話し手の心的態度を叙述したものであるので、「～なさい」は命令形として具現化されたモダリティ表現とみなされる。

森川（2009）では、モダリティ表現は統語上、モーダル（Modal）というカテゴリとして認知され、文構造上、上位に位置するとしてきた。モーダルに包み込まれた中核の要素は、話し手が伝えようとする客観的内容、つまり命題事態である（時枝（1941）、仁田（1991）、森川（2009）参照）。モダリティ表現と命題の統語上の位置関係は、分離CP構造では（3）のように表される。

（3）[ForceP [(TopP) [(FocP) [FinP [IP …]]]]] Force

IPは文の命題を表す。その外側、つまり上位にくるFinPは、文が定形か非定形かを示す時間軸に関わる句と想定されている（長谷川（2011）、榎原（2011）、森川（2011）など参照）。なお、IPとForcePとの中間に位置するTopP、FocPは、それぞれ発話行為に関わる随意的な話題句、焦点句の要素である。そのため本稿では、TopPとFocPが表出する、例えば（4 a-b）のような文は議論から省くことにする。

（4）a. あなたは、行きなさい！ （下線部＝話題）

b. あなたが、行きなさい！ （下線部＝焦点）

FinP層とForceP層との間が、モーダルが一般的に生起できる位置である。<sup>3</sup> 言い換えると、IP内の本動詞や時制辞などはモーダルとはみなされないことになる。

ところが、中右（1980）、寺村（1984）は、主節の動詞や時制にモダリ

ティ用法が見られることを報告している。中右は、(5 a) の文は2つの異質なモダリティの衝突が生じるため非文法的であると説明したうえで、付加疑問文は命題内容の主語と述語に対して呼応するという一般化を出している。

(5) a. \*Surprisingly, he ate wild mushrooms, didn't he?

b. It is surprising that he ate wild mushrooms, {isn't it/\*didn't he?}

中右 (1980: 178)

Surprisingly は、命題内容が真であることを前提として、話し手が下す価値判断の副詞である。また、付加疑問は、命題内容の真偽について話し手が聞き手に確認を求めるものである。よって、同一命題に対して surprisingly は付加疑問と衝突が生じ、その結果 (5 a) は非文法的な文となる。また、(5 b) の付加疑問 isn't it が正しいのは、主節の It is surprising が命題表現であることを示す。つまり、付加疑問が呼応するのは、「主節の主語と述語に対してではなく、命題内容の主語と述語に対してである (中右 1980: 179)」という一般化を中右は導き出している。この一般化を用いて、中右は、発話者を主語とする主節 I think, I guess, I'm (not) sure がモダリティ表現であるとしている。

(6) a. I think you like roast goose, {\*don't I?/don't you?}

b. I imagine he is dating my wife, {\*don't I?/isn't he?}

c. I guess that he likes foreign beers, {\*don't I?/doesn't he?}

d. I'm not sure acupuncture really works, {\*am I?/does it?}

中右 (1980: 180)

次に、寺村 (1984) は日本語の時制がモダリティ表現 (寺村では「モード」形式と呼ばれている) となる場合があることを示している。例えば、想起の「夕」である。これは「過去にいったん認識していたことを忘れていて思い出した、ということを表す夕の用法 (寺村 1984: 339)」で、その例文として (7 a) があり、それに対応する英文 (7 b) が考えられる。

(7) a. お名前は何とおっしゃいましたか？

b. What was your name?

寺村 (1984: 339)

このように、主節の動詞や時制がモダリティを表すことができるわけである。この事実は、(3)の分離CP構造を想定する枠組みにとって一見、問題となりうる。また、次節以降で示すように、これと同様の問題が命令文の分析においても生じうる。その点を明らかにしながら次節では、分離CP構造を用いて本稿冒頭のリストにある命令表現を中心に考察していくことにする。

## 2. 命令文末の要素のカテゴリ

### 2. 1. 肯定命令—その1

まず、日本語の命令文において、肯定の意味を持つ表現形式を取り上げたい。(1 a-b) ((8 a-b)として再掲)を見てみよう。それぞれ、文末が[e]又は[ro]の要素で終わっている。

(8) a. さっさと行け! ([ik-e])

b. 早く食べろ! ([tabe-ro])

命令表現として[e]が付く動詞は、「行く」の他に「読む」「走る」などの五段活用動詞であり、その語幹をローマ字で表記すると子音で終わる。そのため、日本語教育の教科書では子音動詞と呼ばれている。一方、[ro]が付く動詞は、「食べる」の他に「見る」「寝る」「する」などの一段活用動詞・サ行変格活用動詞であり、母音で終わる。そのため、母音動詞と呼ばれている(寺田他1998)。

このように、特定の要素が動詞の語幹に付いて命令形を形作っている。ここで、[e]と[ro]を、時枝(1941)が考察するところの「詞を結合する“辞”」であると仮定してみよう。時枝のいう詞とは客体的なもの(つまり、事柄)を表現する語で、辞とはその詞に対する言語主体の立場を直接に表現する語のことである。辞には、助詞、助動詞、感動詞などが含まれる。したがって、[e]と[ro]は、モダリティ要素である助詞と分類される。すると、動詞の音韻構造に従って両者を使い分けるとしなくてはならなくな

る。構造上、発話行為に関わるモデルが命題内の動詞というカテゴリを選択することはできる。例えば、(9a)の「だろう」はIPを選択するモダリティ表現だが、(9b)の「なければならない」は直接動詞と結合するモダリティ表現である。

(9) a. 太郎は[IP 来 |る／た|] だろう。

b. |花子が[v行か] なければならない／

\*[IP花子が行く] なければならない |

すると、[e] と [ro] は、「なければならない」のようにIP内に生起して、動詞の語幹末を指定する終助詞ということになる。つまり、IPより上位の位置に通常生起する助詞が、ここではIP内の要素だと仮定されることになる。よって、構造(3)に基づく、[e] / [ro] を終助詞と仮定するには無理がある。<sup>4</sup>

なお、『大辞林』(三省堂、1995年)は、[ro]を間投助詞とし、上一段活用・下一段活用・サ行変格活用動詞(母音動詞)の命令形に見られると記述している。しかし[ro]を、語調を整えたり感動・余情・強調などの意を添えたりする間投助詞とするには疑問が生じる。また、[ro]が五段活用動詞(子音動詞)と結合できないことへの説明はない(例：\*|読めろ／読も|！)。

では、[e] / [ro]のカテゴリは何なのか。平叙文末には通常、実現された事態を表す[+時制]素性を持った時制辞[I ru/ta]がくる(例：食べる、食べた)一方、未だ実現されていない事態を表す命令文末には通常、未実現の[-時制]素性を持って命令を表す時制辞[e] / [ro]がくると仮定してみよう。(時制辞は国文法では助動詞とみなされるが、本稿では時制辞と助動詞は異なるカテゴリとして扱う。)IPの時制は定性句FinPに依るので、Forceは定性または非定性を表すFinを選択する。そして、そのFinはそれが選択するIと時制に関して連動する。以降、議論に支障のない限り、このFinPへの言及は省略し、平叙文と命令文は次のように対照する。Forceが[+平叙]素性を持つとそれは[+時制]素性を持つIを選択し、Forceが

[+命令] 素性を持つとそれは [-時制] 素性を持つ I を選択する。その際、[命令] 素性そのものには話し手による聞き手へのモダリティが認識できるという立場から、Force の [+命令] 素性とその Force が持つ話し手による聞き手へのモダリティがその I に継承される、と考えてみよう。この [I + 命令、-時制] が形態的に命令の [e] / [ro] となる。そして (10)、(11) に見られるように、[e] は子音動詞とだけ結合し、[ro] は母音動詞とだけ結合する。つまり、音韻的には、子音で終わる動詞には母音の [e] 形が添加され、母音で終わる動詞には頭子音を持つ [ro] が添加される。<sup>5</sup>

- (10) a. さっさと行け！ ([ik-e] (子音動詞) cf. (8a))  
       b. \*早く起きえ！ ([oki-e] (母音動詞：上二段活用動詞))  
       c. \*早く食べえ！ ([tabe-e] (母音動詞：下二段活用動詞))  
       d. \*早くせえ！ ([se-e] (母音動詞：サ行変格活用動詞))
- (11) a. {食べろ／起きろ／しろ}！ (母音動詞)  
       b. \*{行けろ／行くろ}！ (子音動詞)

このように、[e] / [ro] を助詞ではなく命題内の時制辞と仮定することで、動詞との結合に関してより自然な説明を与えることができる。また、平叙文と命令文との対照性から、[e] / [ro] が長谷川 (2011) の仮定する Fin ではないことも明らかである。

なお、(10d) に関して、サ行変格動詞が [su] ではなく [se] となっているのは、添加する接辞によって動詞内の母音が異なることによる。添加する接辞が現在時制辞「る ([ru])」であれば (12a) のように [u] となり、過去・完了時制辞や話し言葉における命令の接尾辞「ろ ([ro])」、あるいは丁寧語の接頭辞「お ([o])」であれば (12b) のように [i] となる。そして、添加する接辞が書き言葉における命令の接尾辞 [yo] であれば、(12c) のように、[e] となる。<sup>6 7</sup>

- (12) a. する ([su-ru])  
       b. した ([si-ta]) / しろ ([si-ro]) / おし ([o-si])  
       c. せよ ([se-yo])

このサ行変格活用動詞とそれに添加する接辞に見られる母音変化からも、[e] と [ro] が動詞との結びつきが強い接辞であることが支持される。

このように、命令表現として命令の時制辞 [e] / [ro] が命題内に表出する文は、その [e] / [ro] に話し手の心的態度を表すモダリティが認識される。それは例えば (8 a-b) では、何ら有形のモーダル形態素が後接せずとも、動詞と結合する接辞 [e] / [ro] には [Force + 命令] から継承されるモダリティがあるからである。同様のことが、前節で議論した中右(1980)の主節動詞が表すモダリティの問題や、寺村(1984)の指摘する想起の「タ」に係わる時制の問題にも適用できる。つまり、[Force + 平叙] に、例えば [+想起] 素性が添加され、それが時制辞に継承されるとその時制辞がモダリティ表現となると言える。

以上、従来、終助詞／間投助詞と分類されてきた命令文末の [e] / [ro] は、分離CP構造を用いた分析により時制辞という接辞であることが明らかとなった。また、[e] / [ro] の使用は、前接する動詞の種類ではなく、動詞の末尾の音形によるとする、より自然な説明が可能となった。更に、時制辞 [e] / [ro] そのものがモダリティ表現だとする日本語学や生成文法の直観は、発話の力が持つ [命令] 素性が継承された結果によるとする説明が得られた。

## 2. 2. 肯定命令—その2

次に、(1 c, c') ((1 3 a, b) として再掲) の命令文を見ていこう。

(1 3) a. さっさと歩いて！

b. さっさと歩いてください！

上の例文は、その性質上、聞き手(2人称)に向けてのみ発話されるものであることは、自明の理である。この文は、依頼と命令との両方の解釈が可能な表現であるが、ここでは命令の解釈に焦点を当てる。(1 3 a) の「て」は、『大辞林』では、終助詞と記述されている。そして、動詞「歩く」と結合した「歩いて」がモダリティ表現であると認識され、話し手が



聞き手に向かって強制的に歩かそうとするものである。また、(13b)は「動詞+て」に、聞き手に何らかの動作をすることを請い求めた話し手の主観（よって、モダリティ）を含む補助動詞「ください」を後続させた命令表現とみなすことができる。あるいは、「ください」は「くれる」の尊敬語であるので、(13b)の命令文の他に、前節で議論した[e]形の命令文(14)でも可能である。

(14) さっさと歩いてくれ！

いずれにせよ、同じ「て」が(13a)では終助詞として、また(13b)では接続助詞として機能するとみなされてきた。

ちなみに、「ください」は、「くださる」の派生形であり(『大辞林』)、子音動詞が[b]、[m]の両唇性、閉鎖性、かつ有声性を持つ音で終わる場合や[n]で終わる場合は、(15)に示すように、「て」が「で」に音変化する(Tsujimura 1996)。

- (15) a. うまく飛んでください！ ([tob+te → ton+de])  
b. この本を読んでください！ ([yom+te → yon+de])  
c. 死んでください！ ([sin+te → sin+de])

この「動詞+て+ください」は、動詞の連用形に「て」を結合して動作・作用の容態をさまざまに表現する用法と並行する。次の例はそのことを表す。

- (16) a. 見上げている  
b. 書いてしまう  
c. 行ってみる (『大辞林』(「て」の項))

(16a)では、状態を表す補助動詞「いる」が、「見上げる」という動作を表す動詞の動名詞形に続き、全体として動作の継続を表す(Kuno 1973: 141)。(16b)では、「書く」という動作が完全に終わることを表す。(16c)では、「行く」という動作を試しにするという意味となる。このように、「て」と結合する補助動詞は、話し手が伝えようとする客観的内容である。

この事実から(13b)、(16)の補助動詞「ください／くださる」「い

る」「しまう」「みる」は、それぞれ動詞の連用形に「て」が付いた動詞句と結合する述語で、命題内に生起すると考えられる（長谷川（1999: 120）も参照）。従って、（13a）の「て」自体はモーダルではないが、命令文という文脈でモダリティが得られたと考えるのが自然である。

もしこの結論が正しいとすると、補助動詞「ください」には、「て」で終わるカテゴリを選択できるという制限が統語上、存在することになる。実際、この見解は影山（1993: 74-96）に見られる。「動詞+動詞（ $V_1+V_2$ ）」の複合動詞に、語彙部門で形成される動詞A類（例：「書き込む」「押し開ける」など）と統語部門で形成される動詞B類（例：「呼び始める」「愛し続ける」など）の2種類がある。両者の違いは、「そうする」代用化、受身化、尊敬化の統語操作の適用の可否によって明らかになる。

（17）「そうする」代用化：

- a. 書き込む → \*そうし込む （A類）
- b. 呼び始める → そうし始める （B類）

（18）受身化：

- a. \*書かれ込む （A類）
- b. 呼ばれ始める （B類）

（19）尊敬化：

- a. \*お書きになり込む （A類）
- b. お呼びになり始める （B類）

影山は、原則的にすべてのB類の動詞に上の統語操作が可能であるとしている。この事実から、 $V_2$ がその補部に動詞句VPを取る構造が想定されている。<sup>8</sup> なお、語彙的なA類と同様、B類の動詞も形態的にはひとまとまりとなっているので、影山は統語でVPから $V_1$ を取出し $V_2$ に接合（“編入”）する操作が適用されると仮定している。

影山は、同様の分析を「 $V_1$ +て+ $V_2$ 」の一見、複合動詞に見える述部にも適用し、考察している。（16a-c）の「ている／てしまう／てみる」などは、影山のいうB類の動詞である。例えば、（16a）は「そうしている

／見上げられている／お見上げになっている」のように、 $V_1$ に「そうする」代用化／受身化／尊敬化が適用できる。しかし、 $V_1$ から $V_2$ への編入がないことは、「も／さえ／ばかり」などの副助詞を付けられないことから明らかである。

(20) \*食料を買い込みサエ始めた。 影山 (1993: 169)

上の例が示唆することは、「 $V_1$  + て +  $V_2$ 」には、動詞以外のカテゴリとしての「て」が介在しているということである。また、 $V_2$ に「ください」を用いても、同様のことが言える。例えば、「見上げてください」は、「そうしてください／見上げられてください／お見上げになってください」のように「そうする」代用化／受身化／尊敬化が適用できる。

では、この問題の「て」は何なのか。それは、動詞 $V_1$ に後接していることから非時制を表す時制辞と仮定できる。もう少し具体的に言うと、以下のようなになる。この「て」を動名詞形と仮定する Kuno (1973: 141) を援用して、「て」形は [+N] 素性を持つとする。また、仁田 (1991) に沿って、未だ実現されていない事態を表す命令文は未実現の時制を持つとする。つまり「て」は、[-時制、+N] 素性を待ったIということになる。また、補助動詞「ください」も、未実現の時制を表すものでなければならないので、非時制の要素が後接しているということになる。しかし、補助動詞「いる／しまう／みる」は、その語尾の時制も示すように非過去を表すので、「ください」とは異なる。

以上の議論を基に、「て／ください」を、分離CP構造の枠組みで考察していくことにする。命令文のForceが [+命令] 素性を持つと、補助動詞「ください」が (13b) のように表出することができる。その場合、その補助動詞を選択する主要部Iには、Forceの持つモダリティが継承されることになる。その結果、「ください」がモダリティ表現であると認識される。一方、「ください」が (13a) のように表出しない場合、Forceが選択するIPの主要部Iには、[-時制、+N] 素性を持つ接辞「て」が生起する。その「て」にモダリティがForceから継承され、それと結合する本動詞全体がモ

ダリティ表現であると認識される。

ここで注意を要するのは、丁寧語の接頭辞「お」が一見、動詞に付いた(21 a-b)のような表現である。ただしこの場合も、補助動詞「ください」は、随意的に生起できる。

(21) a. さっさとお歩き(ください)！

b. 静かにお食べ(ください)！

もし[v ください]が連用形で終わる動詞に結合できると仮定すると、丁寧語「お」が生起しない命令文(22 a-b)も文法的だと誤って予測してしまう。

(22) a. \*さっさと 歩きください！

b. \*静かに 食べください！

従って、この仮定には無理がある。

そこで、Suzuki (1989)に従って、丁寧語「お」は(23 a-d)に示すように[+N]素性を持った名詞、形容詞、あるいは形容動詞に付くことができるので、(21 a-b)の[お+V]の連鎖は決定詞句DP(以降、このDPは便宜上、名詞句と呼ぶことにする)を構成すると仮定してみよう。

(23) a. お勉強 (名詞) ([+N, -V])

b. お見事／お美しい (形容動詞／形容詞) ([+N, +V])

c. \*お見る (動詞) ([-N, +V])

d. \*公園おで (後置詞) ([-N, -V])

また、(24)に示すように、補助動詞「ください」が漢語系熟語の名詞と直接結合することはない。<sup>9</sup>

(24) a. \*さっさと 仕事ください！

b. \*丁寧に 説明ください！

この事実から、基底では(21 a-b)はそれと同義の(25 a-b)のように、Suzuki (1989)を受け入れて、[お+V]が「になる」(後置詞+動詞)を伴った形をしているとする。そして、音韻部門で(26)に示すように、その「になる」が接辞「て」と共に削除されたと考える。

(25) a. さっさと [お歩き] になって (ください) !

b. 静かに [お食べ] になって (ください) !

(26) さっさと お歩き (ください) !

なお、「て」の削除は拘束形態素であることによる。

このように、非時制の補助動詞「ください」が表出するとき、それが選択できるカテゴリは、主要部が未実現を表す [-時制、+N] 素性を持つ IP であると言える。そして、この I は、形態的に「て」として表出する。また、その「ください」が表出しない場合は、[-時制、+N] 素性を持つ「て」を主要部とする IP が表出する。いずれの場合でも、その主要部は、Force から継承する [+命令] 素性があるためモダリティ表現と認識される。(なお、「になって」で終わる場合の (25 a-b) から、「になって」が削除された (21 a-b) においても、その音だけが削除されたと考えられるので、そのモダリティの解釈は残る。)

## 2. 3. 肯定命令——その3

次に (1 d-d') ((27 a,b) として再掲) の命令文に目を転じてみよう。一般的に、(27 a) の「な」は (27 b) の「なさい」の短縮形とみなされている (『大辞林』)。

(27) a. 早く食べな !

b. 早く食べなさい !

「なさい」は、動詞「する」の尊敬語「なさる」の命令形である。

(28) a. 3年前、田中先生が退職なさった。

b. 明日、お仕事なさいますか。

c. おだまりなさい !

上例から明らかなように、「なさる」は名詞と結合できる本動詞である。「なさる」が (28 a) では名詞と、(28 b) では [お+名詞] と、そして (28 c) では [お+V] の名詞句と結合している。このように「なさい」は、前節で議論した「ください」(cf. (21 a)) とは異なって、本動詞として機

能することができる。

もちろん、「なさる」は本動詞の他に、補助動詞としても機能する。というのも、(29a-b)に示すように、「なさる」は、動詞と直接結合できるからである。

(29) a. 行きなさる。

b. 早く行きなさい！

Cf. 早くお行きなさい！

「なさる」は、影山(1993)の分類するB類の複合動詞のV<sub>2</sub>にあたる。よって、[v<sub>1</sub>行く]と[v<sub>2</sub>なさい]との間には時制は介在しない。なお、動詞に「お」が付いた(29cf)は、(28c)と同じ形をとるので、この「なさる」は本動詞である。

ここで、補助動詞「なさい」の短縮形「な」をなぜ独立した終助詞とみなすのかという疑問が生じる。両方とも、モダリティ表現である。もしこの「な」が終助詞ならば、(28c)の「なさい」と置換可能のはずであるが、事実はそうではない。

(30) \*おだまりな！

(30)の非文法性は、「な」が補助動詞のみの機能しか持たないことに起因する。そのことは、次の名詞+「な」の例が非文法的であることから明らかである。

(31) \*早く仕事な！

まとめると、補助動詞「なさい」とその短縮形「な」は、両方ともVPに後接する。また、「なさい」は、本動詞としても機能する。このことを、形式化すると次のようになる。

(32) a. 「なさい／な」(補助動詞)：VP \_\_\_\_

b. 「なさい」(本動詞)：NP \_\_\_\_

いずれの場合も、2.1、2.2で議論したように、Forceから[+命令]素性を継承したIが後接することから、モダリティ表現とみなされる。

## 2. 4. 肯定命令—その4

肯定命令の最後の例として、(1e) ((33)として再掲)を見てみよう。

(33) 十分気を付ける {こと／の} ! [↘]

文末に付した記号[↘]は、下降調イントネーションを表し、文は命令文と解釈される(森川(2011: 50)、乗原(2011)など参照)。もしイントネーションが下降調ではなく、平板あるいは上昇調となると、(33)は平叙文、感嘆文、あるいは疑問文と解釈されることになる。

さて、この「こと／の」のカテゴリは終助詞であるが(『大辞林』)、本稿では、構造上、命題の時間軸に関わる定性句FinPの主要部Finに出現するものであるとする(森川2012: 66-70)。「こと／の」がFinであるとすると、(33)の構造は次のようになる。[Force + 命令]は、未実現の[Fin - 時制]を主要部とするFinPを選択し、またそのFinは[I - 時制]を主要部とするIPを補部を選択する。この構造では、過去・完了時制辞を持った(34)のような命令文は、生起することはない。(ただし、平叙文としては文法的である。)

(34) \*十分気を付けた {こと／の} !

本節をまとめると、分離CP構造を用いることによって、従来の助詞・助動詞のカテゴリを修正、あるいはより精密に分類することが可能となった。命令文の発話の力Forceは、[+命令]素性を持ち、それと関連する下位のFinP/IPの主要部要素にはバリエーションがある。次の表は、そのことをまとめたものである。

(35)

命令文末の Fin/I	Fin/I が選択する句の主要部
[Fin {こと／の}、-時制]	[I -時制]
[I e/to、-時制]	V
[I Ø、-時制]	[v ください／な (さい)]
[I て、-時制、+N]	V

命令文が常に未実現の時制を伴うという事実は、この表の「－時制」素性から説明される。命令文は話し手による聞き手への心的態度を表す文であるため、それ自体モダリティを含む。そのモダリティはForceから音形を持つ終助詞Finに継承される。あるいは、そのFinが音形を持たない場合、その下位の「I－時制」にモダリティが継承される。そしてそれが、命題内に生起する命令形あるいは命令を表す形態素と結合し、モダリティ表現として認識される。このように、命令文末の要素にはカテゴリ上、あるいは形態上、バリエーションがある。また、従来、「ろ」や「て」など助詞と分類されてきた要素は時制辞として、また「こと／の」は非定性を表す終助詞として機能するという結論が得られた。

### 3. 否定命令

前節では、肯定命令文の文末には、音形を持つ要素として補助動詞、接辞、あるいは非定性の終助詞が表出することを見てきた。本節では、否定命令文における文末の要素を考察していく。

#### 3. 1. 「で／てください」

まず、冒頭で見た否定命令文のうち、(2 a-c) ((3 6 a-c) として再掲)を考察することにする。

- (3 6) a. そんなもの食べないで！
- b. そんなもの食べないてください！
- c. そんなもの食べないこと！

Cf. \*そんなもの食べなかったで！ (命令文としての解釈)

否定命令文は、基本的に命題IP内に否定の助動詞句を含む。従って、(3 6 a) の場合、動詞「食べ」に否定を表す助動詞 (Aux) 「ない」が後接する。また、この「ない」は、(3 6 cf) に示したように、過去・完了時制が後接しないという事実から、単にAuxのカテゴリで無時制であるか、又は空の非時制辞が付いていると考えられる。



命令文におけるAux「ない」の時制を明らかにするためには、その「ない」に後接したモダリティ表現の「で」のカテゴリを決定する必要がある。(36b)の「で」は、前節で議論した「ください」が後接できるという事実から、非時制辞Iの「て」が音変化したものと仮定することができる。ただし、この変化に関わる環境は、(14a-b)で議論した子音動詞の状況とは異なる。(詳細については今後の課題としておきたい。)すると、(36a-b)の「で」と(36b)の「ください」は、肯定命令文についての議論が適用される。つまり、従来終助詞とされてきた(36a)の「で」は時制辞であることから、それに前接する「ない」自体は無時制であるという結論になる。また、この「で」は、[+命令]素性を持ったForceによって選択されているのでそこからモダリティを継承して、解釈上、モダリティ表現とみなされる。

最後に(36c)の終助詞「こと」であるが、文の構造上、Finに位置する。これについては、2.4の議論を見られたい。

### 3. 2. 禁止の「な」

最後に、文末に「な」が付く(2d)((37)として再掲)の命令文を考えたい。

(37) 行くな!

これは、未実現としての時制辞[r]uが動詞「行く」と結合し、さらに、禁止を表す終助詞「な」が後接しているように見える。前述したように、長谷川(2011)は、この「な」はFin位置の終助詞だとしている。しかし、そもそもこの文が命令文であるためには「話し手は、相手たる聞き手がある働きを実現することを、望んでいる(仁田1991: 238)」ことが必要である。この見解に沿うと、話し手が望んでいるのは、聞き手が「行かない」という命題事態部分である(中右(1980: 190)も参照)。別な言い方をすると、禁止の「な」は、Force近く、あるいはその上位に現れる終助詞ではないということである。よって、禁止の「な」は否定の「な」を用いた表現

で、その構造上の適切な位置を IP 内とする (38a)、あるいは命題の時間軸 FinP と関わる位置とする (38b) ということになる。

(38) a. [ForceP [IP [AuxP [V 行ku] [Aux な]] [I Ø]] [Force + 命令]]

b. [ForceP [AuxP [FinP [IP [V 行k] [I (r)u]]] [Aux な]] [Force + 命令]]

否定の「な」は、(38a) では [Force + 命令] に選択された IP 内で動詞と結合しているが、(38b) では [Force + 命令] に選択された FinP に後接している。(38a) の [行ku] はここでは暫定的に動詞とするが、この点については後に議論することになる。) この「な」が (38a)、(38b) いずれの位置に現れても、それは助動詞が表出できる位置である。そのことを否定の助動詞「ない」で確認しておこう。「ない」は通常、(39a) で示すように動詞と結合し、IP 内に現れるが、(39b) で示すように FinP に付くこともできる。

(39) a. [IP あの人が [v 行か] ない]。

b. [AuxP [FinP [IP 何も {怒る／\*怒った} こと] ない] やろ。

このように、否定を表す助動詞には、「ない」の他に「な」があると言える。

さて、例文 (37) の構造として (38a) と (38b) のどちらが妥当かということに目を向けてみよう。まず (38a) であるが、(37) の構造としては適切ではない。というのも動詞「行く」の語幹 [ik] に付く母音 [u] が時制辞だと考えられるからである。(ただし、動詞に「な」が後接する (38a) の構造自体を否定するわけではない。後述するように、その例は存在する。)[行く] の [u] が時制辞であることは、それが Fin「こと」に前接する (40) の事実から確認できる。

(40) a. 明日行くことができます。 (/ik+ru/ → [ik+u])

b. 朝早く起きることはいいことです。 ([oki+ru])

この [(r)u] は現在を表さない、非時制の辞であると分析できる。(40a) では、[k] と [r] の子音が重なるので、後接する子音は削除されている (Tujimura 1996)。同様に、(37) の「行くな」の [u] も非時制の辞である

と考えられる。

次に、例文(37)の構造として(38b)が適切であるかどうかを考えてみよう。(38b)のように「な」がFinPに付くことができる。その際、FinPの主要部は、(41)で示すように、「ない」の場合とは異なって空要素となる。

(41) [AuxP [FinP [IP 行k(r)u] [Fin Ø]] [Aux な]]

このように、否定の「な」がFinPに後接すると、従来の「な」の記述に関する一般化を一部修正しなければならない。『大辞林』には、感動、主張、断定、願望などを表す終助詞「な」は従来、活用語の終止形や助詞に付くが、強い禁止を表す「な」は動詞・助動詞の終止形のみに付くと記述されている。

(42) a. ずいぶん立派になったな (感動)

b. だれか来ないかな (主張)

c. 決して油断するな (禁止) (下線とカッコ付き部分は筆者による)

『大辞林』(「な」の項)

(42b)のような助詞に付くことができる「な」は、実際、終助詞として機能し、構造上、ForcePに後接することになる(森川(2009)参照)。しかし、(42c)のような禁止の「な」は、非時制の[(r)u](つまり、動詞・助動詞の終止形)を含むFinPに後接するので、上述の一般化の下線部分は、「強い禁止を表す助動詞」「な」は動詞・助動詞の終止形あるいはその音の連鎖から一見動詞・助動詞の終止形と思われる形に付く」と修正する必要がある。また、禁止の「な」が助動詞であるため、例えば(43a-b)に示すように、「な」に後接できる終助詞「よ」が「な」に先行しないことを保証する。

(43) a. 今、行くなよ！ (禁止)

b. \*今、行くよな！ (禁止)

さて、動詞と直接結合する否定の「な」について、現代日本語ではその例を見つけることはできないが、中世日本語では可能と思われる。次の

(44)、(45)を見てみよう。

(44) 竜の頸の玉取りえずは帰り来<sub>(く)</sub>な (竹取)

(45) a. 万一うせたりとも物いふな。顔も見な (浄瑠璃・宵庚申<sub>中</sub>)

b. さて俺に此の邸へ来<sub>(こ)</sub>などの言分じゃよな

(歌舞伎・富士見る里)

『大辞林』(「な」の項)

(44)は動詞の終止形に否定の「な」が付く例であるが、この「来」は[ku]と発音される。ところが、中世では(45a-b)で示したように、連用形や未然形にも接続することがあった。(45a)では、一段活用動詞「見」に否定の「な」が直接付き、また(45b)ではカ行変格活用動詞「来」に否定の「な」が直接付いている。これは(37)の「行くな」とは異なっていて、助動詞Aux「な」が動詞に直接後接する場合と考えられる。その理由として次の2点が挙げられる。まず、(45a-b)では、非時制の辞が動詞と「な」の間に介在しない。第2点目は、(45b)の「来」は、通常の[ku]の発音ではなく、[ko]の発音となっている。この「来」の、(44)と(45b)とでの発音の異なりは、否定の「ない」が付く場合と並行する。そのことは、次の例で示されている。

(46) a. [FinP 来<sub>(く)</sub>ること] ないよ。

b. [AuxP [V 来<sub>(こ)</sub>] ない] よ。

動詞「来」と「ない」が隣接する(46b)のときのみ、[ko]と発音される。その他の場合、例えば両者の間に何らかのカテゴリがあり隣接しない(46a)は、[ku]と発音される。このように、中世では否定の「な」も動詞との直接の結合は可能であったと考えられる。

以上、本節では禁止の「な」は終助詞ではなく、否定を表す助動詞であることを示した。その主たる根拠は、否定の助動詞「ない」と同様に、直接動詞あるいはFinPのいずれかに付くことができるという事実にある。いずれの場合であっても、この「な」は、[Force + 命令]からFinに、あるいはFinを経由してIに継承するモダリティのため、モダリティ表現として認

識される。

#### 4. その他のタイプの命令文

前節で見たように、命令文は構造上、上位には [+命令] 素性を持った Force 層があり、その下位の FinP 層、更には IP 層が未実現の時制を含むことが明らかとなった。また、その時制は形態上、現在あるいは過去・完了を表す時制辞以外のものであった。本節では、通常の音形を持った時制辞と思われる [ru/ta/i] が文末に用いられる命令文を考察していく。まず現在を表す接辞 [ru] が、未実現を表す形で用いられている (47) である。

(47) (人をせかせて) 早く {行く／起きる} !

その他に、過去・完了時制を表す [ta] や否定の助動詞「ない」や形容詞に添加した現在時制辞 [i] で終わるものについても命令文末として機能するという、興味深い観察が横田 (2007) で報告されている。<sup>10</sup>

(48) a. (せかすように) ほら、食った、食った!

b. (万引きをした子供に) ちょっと待った!

c. (警察が) こら、自転車の2人乗りはしない!

d. (授業中に騒いでいる学生に) うるさい!

横田 (2007: 197-198)

ただし、次の例文が示すように、否定の「ない」や形容詞に過去・完了時制辞を添加した命令文は、非文法的である。

(49) a. (警察が) \*こら、自転車の2人乗りはしなかった!

b. (授業中に騒いでいる学生に) \*うるさかった!

というのも、[ru]、[ta]、[i] を文末に用いた命令文は、横田が指摘するように、差し迫った状況でのみ使える命令文だからである。

(50) a. \*明日、食った!

b. 明日、食え! 横田 (2007: 197)

このように、時制を表す接辞 [ru/ta/i] には、未実現の用法がある。本稿では、これらの接辞を持つカテゴリ I は、その上位層にある Force によって

選択された、Finの持つ非定性と関わるという立場をとる。ただし、上述したように、これら特殊な（日常ではよく用いられる表現なので、「特殊」という言い方は矛盾するかもしれないが）例文における[<sub>i</sub> ru/ta/i]には、[-時制]の他に[+切迫性]という素性を持つと仮定することで説明が可能となる。別な言い方をすると、未実現の接辞[ru/ta/i]が現れる場合は、その文のForceは[+平叙]素性ではなく、[+命令、+切迫性]素性を持つということである。もし本稿の提案が受け入れられないとすると、(47)、(48)、(50)の文末の[ru/ta/i]のカテゴリは“終助詞”とみなされるだろうが、そこには疑問が残るであろう。

## 5. まとめ

本稿は、命令文の標準的な表現形式における文末の要素を、Rizzi (1997) の分離CP構造を用いて考察した。その際、命令文が持つモダリティは、発話行為が関わる上位の層で、文のタイプを示す発話の力（Force）にあり、Forceとの関係が強ければ命題内の述部に継承されると仮定して議論を進めた。その結果、動詞の連用形に添加された「ろ」「て」など、国文法で終助詞／間投助詞と分類される要素は、実は、接辞（国文法では助動詞にあたる）であることを示した。また、動詞の終止形に添加された「こと／の」の要素については、構造上、直接動詞に添加されているのではないことを明らかにした。更に、否定の助動詞「ない」は、原則、命題内に表出するが、禁止の「な」についてはこれも否定表現ととらえ、「ない」と同様の分析が適用できることを主張した。

## 注

<sup>1</sup> 例文(1)、(2)は標準的な例であり、方言を入れると命令文の表現形式は豊富である（尾上 2001 参照）。そのため、本稿の分析はあくまでも一部の形式を対象としている。他の表現形式については今後明らかにしていく必要がある。

<sup>2</sup> 日本語教育では、「ろ」は話し言葉的として分類され、それに対応する書き言葉的なものが「よ」とされている（高野泰邦（私信））。

(i) 早く食べよ！

本稿では、主として「ろ」を用いて議論を進める。

<sup>3</sup> ただし、主語についての情報を客観的に表すことができるタイプの助動詞（例えば、「なければならない」）はモダリティ表現としてIP内で機能しうる（森川2009: 82-88）。

<sup>4</sup> 同じ趣旨の指摘が尾上（2001）に見られる。

<sup>5</sup> (10c, d) の命令の [e] は、(i) で示す動詞末の母音を伸ばす音とは異なる。

(i) a. 早く食べー！ ([tabee])

b. 早くせー！ ([see])

動詞末の母音を伸ばす現象は、どのような動詞が命令文に用いられても観察できる。

(ii) a. さっさと行きー！ ([ikii])

b. 早く起きー！ ([okii]) / \*早く起きえ！

c. 早くしー！ ([sii]) / \*早くしえ！

(iia) は子音動詞の例で、(iib-c) は母音動詞の上一段活用とサ行変格活用の動詞の例である。また、(iib-c) は、命令の [e] が添加できないことも示している。

<sup>6</sup> なお、サ行変格活用動詞の語幹の母音が [e] となる音変化については、否定辞 + 疑問の終助詞「カ」が後接する命令文 (i) にも見られる。

(i) 早よ {せ / \*し} んカ！

<sup>7</sup> 命令文で一段活用動詞あるいはサ変活用動詞に添加した「よ」は、話し言葉として用いられている（注2参照）。この「よ」は、本稿では接辞と分析しているが、「よ」には他に、命令・禁止などの意を強めて言い表す終助詞としての機能がある。

(i) a. 早く食べろよ！ / 早く起きろよ！

b. 仕事しろよ！

c. たくさん本を読めよ！

しかし、命令の接辞「よ」と終助詞の「よ」との連鎖は許されない。

(ii) a. \*早く食べよよ！

b. \*早く起きよよ！

c. \*仕事せよよ！

<sup>8</sup> 統語的な複合動詞には、(ia-b) に示すように、補部にVPを選択する V<sub>2</sub>（例：

「つける」)とV'を選択するV<sub>2</sub>(例:「忘れる」)の2つのタイプがある。

(i) a. VPタイプ:

太郎が[<sub>VP</sub> PRO ご飯を食べ] そびれる。

b. V'タイプ:

子供が[<sub>V'</sub> 手紙を出し] 忘れる。

(例文 (ib) は影山 (1993: 159) からの引用)

両者の違いは、補文内の目的語が直接受身ができるかどうかである。

(ii) a. \*ご飯は太郎に食べそびれられる。

b. 手紙は子供に出し忘れられる。

V<sub>2</sub>が補部内部に言及しない(つまり、 $\theta$ 役割を付与しない)(iia)は受身化が不可能である一方、V<sub>2</sub>が $\theta$ 役割を付与する(iiib)は受身化が可能である。

なお、「V<sub>1</sub> + て + V<sub>2</sub>」がVPタイプに分類されるということは、補文内の目的語が主文主語となる直接受身ができないということである。

(iii) a. 課長はドイツ製の万年筆を愛用している →

\*ドイツ製の万年筆が課長に愛用していられる

b. 桜の木を切ってしまった → \*桜の木が切ってしまわれた

(間接受身「桜の木が切ってしまわれた」なら適格)

c. 冷蔵庫の中をのぞいてみた → \*冷蔵庫の中がのぞいてみられた

d. ドアをノックしてみた → \*ドアがノックしてみられた

影山 (1993: 170-172)

(iiia)では、V<sub>2</sub>が自動詞なので直接受身は不可能である。(iiib)には、語彙的主語が現れうる(例:「子供がお金を落として」しまった)ので、V<sub>2</sub>「しまう」が補文内の目的語をその目的語とする受身化は難しい。ただし、(iiic-d)に関して、V<sub>2</sub>の「みる」が補文内の目的語を $\theta$ 標示している場合(iiid)に、主文の受身が可能である。

<sup>9</sup> ただし、丁寧語「お」を添加しても文法性は変わらないが、「ご」を添加すると文法的になる漢語系熟語があると高野泰邦氏に(私信)ご指摘いただいた。

(i) a. \*さっさと お仕事ください!

b. \*きちっと お掃除ください!

(ii) a. 丁寧に ご説明ください!

b. ゆっくりと ご進入ください!

これには、漢語系熟語に後接するサ行変格活用動詞「する」の省略の可否が関わると考えられる。



(i') a. さっさと お仕事してください！

b. きちっと お掃除してください！

(ii') a. 丁寧にご説明してください！

b. ゆっくりと ご進入してください！

「ご」が添加されるタイプは「する」の省略が許容されるが、「お」のタイプはそうではない。(なお、漢語系熟語の名詞で「お」「ご」のいずれも添加可能な「返事」の場合、「お返事ください！」は文法的であるが、これはこの「ください」が本動詞として機能できるからである。)この漢語系熟語が関わる問題については、今後更に熟察していきたい。

<sup>10</sup> 横田 (2007) は、文形式をとらない副詞あるいは名詞 1 語で命令表現となる例も出している。

(i) a. (すぐに行動しない子供に) 早く！

b. (妻に) お茶！

横田 (2007: 198-199)

これらは、例えば「早く(しろ)！」や「お茶(をくれ)！」のように、述部の省略が関わる可能性もあるので、本稿では考察の対象とはしない。

## 参考文献

Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. MIT Press, Cambridge, MA.

Kuno, Susumu (1973) *The Structure of the Japanese Language*. MIT Press, Cambridge, MA.

Suzuki, Tatsuya (1989) “A Syntactic Analysis of an Honorific Construction *O ... Ni Naru* under the DP Hypothesis: Toward a Unified Theory of Honorification,” *West Coast Conference on Formal Linguistics VIII*, 373-383.

Rizzi, Luigi (1997) “The Finite Structure of the Left Periphery,” *Elements of Grammar: Handbook of Generative Syntax*, ed. By Liliane Haegeman, 281-337, Kluwer, Dordrecht.

Tsujimura, Natsuko (1996) *An Introduction to Japanese Linguistics*. Blackwell Publishers, Oxford.

長谷川信子 (2011) 「統語構造と発話の力—日本語の CP 領域現象から」 武内道子・佐藤裕美 (編) 『発話と文のモダリティ—対照研究の視点から』 (神奈川大学研究叢書 1) 89-114 ひつじ書房

影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房

- 栞原和生（2011）「補文標識とWh句の共起関係について—理由を表すWh付加詞を中心に—」長谷川信子（編）『70年代生成文法再認識—日本語研究の地平—』151-176 開拓社
- 森川正博（2009）『疑問文と「ダ」——統語・音・意味と談話の関係を見据えて』ひつじ書房
- （2011）「分裂文の「ダ」」『名古屋外国語大学外国語学部紀要題4 1号』35-61
- （2012）「分裂文の「の」と「ダ」」『名古屋外国語大学外国語学部紀要題4 2号』63-80
- 中右実（1980）「文副詞の比較」國廣哲瀾（編）『文法』（日英語比較講座第2巻）157-219 大修館書店
- 仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 尾上圭介（2001）『文法と意味I』くろしお出版
- 寺田和子、三上京子、山形美保子、和栗雅子（1998）『日本語の教え方ABC』東京：アルク
- 寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味 第Ⅱ巻』くろしお出版
- 時枝誠記（1941）『国語学原論』岩波文庫
- 横田隆志（2007）「日本語教育における「命令文」についての一考察」『北陸大学紀要第3 1号』193-200

## 辞書

- 松村明編（1995）『大辞林』第2版 三省堂